不審紙

健5
319
今

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

播伊

不審紙巻之五目錄

三世因果
御大法
法けしきぞ
論語讀ん論語ん
見ぬ戀

遠門
319
八

不審紙巻五

二世因果

儒家は二世を立てず仏家ふい立てまして氷炭
海とちがうぞまず仏法の理は能く因果をと
見て。翻まこうの性いたまこちらの翻こうの農
夫い生まれ変り傳と生れ変り大まの
ねは傳い諸せうまこうこうぞ化れ
君に生ずるものは宿傳の報いを受ける
思慮凝やこうこ。凝とこれい習うこうと滅する

といへども。そこ深にむかうまてまことはとひ。
然中人い良知ありて隙よりの〳〵これを
様さいうりて後又心性の修練とりて神
も仏ともちるべし。是ハ徹れ智中の
智ちり或いやしき家業と行〳〵い常ともも
出者ともまどべし。者獣い品ものてそれ
中あるとだ猿の如い蹟知といへども是品中の
智ちり過窮れ如い情まて凝ちるゆへ
是品中れ品ちり。況略窮ものおよびざる

情ゞ何の智恵家業人乃恵ありて学紀ゆ
うぐりちるき大家十箇れ大まと出んや品
幼年の時情ゆ煙草まの暗とにるへ見るはさ
ちまは岡へ若しきけるゞは中より腸式
出しゝ水中に潜ゞ洗て又腸と春。これと
えるふ付ても百一部格れ仕合ゆて人業
とゆるも。洗相なの嘱ゆ出するもも
なるるや。早下ちりとへどと人乃いはゞる
しゝといおきへども洗濯とはれ学ゆ用法

もあるゝ大まよはせうとい所腹痛さの
ちうり何乃ゆ何の村れる言百姓がと者
系のまのまんよはまゝ何源色何の町れ
三分ゆ百れとんてれた巻つが忽考れとのと
はれとうと。番酒よゝまとそゝるゝものでも
ちうゝ色去未来もれとゝて知んが仏智ゝん
べゝ。含嫉れ大守佛を仕伯して豊信と
建立ゝ信を仕者すゝるゝ法よるゝうり禅美
宮ごいとく大守化生家美にはまれんゝるまゝが

えちうゝべゝ。仏果とゆんゝすい宮ゝが浸ちうゝど
とゝはれむちうり。仏去れ癖として傘の猫ゝる
も色去れ因縁ゝとゝるゝ歌とのゝ心ゝそい
宵べゝうゝびゝむゝゝ。嘘が産ゝ人へ蔵ゝ報ひり
ゝり今生で産ゝ人が嘘ゝおけるゝそもゝ
ゝゝ。残日師ゝが出ゝれゝうちゝまゝべ今ゝゝゝ云
におゝゝゝゝゝ又傷ゝゝ道化自紙ゝて三世い
ちゝく猫も移ゝも化も素品点と減とれゝ
宮ゝ天心ゝ泡ゝ。竟れゝに舞ちゝく饗腰の

ゑは舜あるべき聖賢変ありと。是又
孔子の門徒より出たる。集義和書ふ見性悟道の器と□と
あり。仏氏い大虚と出陰陽とはなるべき所なり。
とゝの大虚外なり。陰陽なるべきものなり。只□
又輪廻なるべきものなり。
此寂然不動の釈学なるべし。
なり。真と見て仏性と。変化いろゝて
不生不滅なるべし。成仏と。陰陽生ぜれ

きとはなるべきて二変生れぬ。孫なれと
なりて離生死とゝなるべし。造化い変
為ゝて、空中ゝ生ぜ生ぜるものい消
ぜ。物のいゝ。輪廻といゝ。無
始無終といゝ。不生不滅といゝ。
□のお後あるべ。形象声臭ぞふ。
生ぜ又滅するといゝ。不生不滅
といゝ。真如と。
すべきなり。

りのいろ〻ものあり。皆りのい凝こりのい
蔵ど。又仏氏大虚と云陽とあるゝと
いつりとしるのゝいわゆ中れ他共のしるゝ
孔氏円外乃書も出のまゝにしるる時ハ書
おきあいあるゝ。默門ゝり出く釈法よと
ゆれどんで真れ仏法ちるべゝば孔門と学
孔法と極ずんば学れ聖理ようるべゝば。
共ゝ質見徴勝といつべし。縱佛者修行
熟して空ゝ帰しゝゝも陰陽れ氣と

それ濁ゝといひぐゝ〻いんとちれいて化の
百れ変容ゝ暴あり。変中れ煖氣暴
中の冷氣もあり。又清濁と別ゝゝといへども。
清中乃濁。清中れ清。濁中の清。濁中れ濁を。
大槩を論ぜば清るゝのゝりて天とちる。是
儒家れ天心ゝ濁ゝとも。仏家れ垂迹界を家
ゆれる間系ともいつべし。
多眠濁情の及濁をるいゝりて地ゝ為ゝ。鬼魅
魍魎とちるゝ。毒氣凝とれい或い人の家と

うり。或い宮とあるうり人は俗云とちうとこれ
柏は地底の國なり黄泉とも地獄ともいへり。
又彼云色界にあるものも世界は仏菩の居
法陽とそれまで微塵も濁事なくして
ちうとあるうたるものちうべきやや。哲言技習生
そ清中は濁事とかてまどろあるべきと
五体の中間に三魂七魄のもれまじて人
とひうそれ人乃も男性女心女性男心あり人
面獣心畜類人心あり。それ外生相万像準

こそ知るべし。若そのひとりもひうまとまどる而
ちうう人云病ちうる附脱とさぐまとし一相も
なし。凝ちうさい魂とちうう。重病とちうふ
ちうさぐひ乃に死ぜば死て火葬よすれども
病魂い神をばちうく凝ちうい有情とちうう
火の間ちう這出ちうけめぐりさうるもあるも。
これ氣は凝ちうい形とちうう謂ちうう。抑
人書ともに陰陽交合して一滴の濁水凝り
て形とまばそれ胎内事れ霜て人心は集り

ようい人間は鞠へさそいまた畜心の發ぶる
を畜生の鞠へのめりのぼべ〜。清〜〜〜〜魂
氣い天氣よ散じぶべ〜。羅山子は云散る花
枝にゝ〜〜〜と。地情のそれ濃ぶきまんゝ云
ちゝ〜。豈有情と云〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
女とふ〜〜〜。女い男を恢ぶる。陰陽和合天
然自然ゆゑ。女子い腦中ゆく父の言と
白吞て出産の約僧生〜〜〜てとゝ見てれ
男子い腦中ゆて母と抱吞て出産の約僧

生〜〜て地とゝんて生ぶ。是その父母交合
の氣を感じて業腦を所謂こ。女は母の胎
化生ハ吸男子や生きんと。爲常心性
乃搬涙ゆゑ云ふ。よこそ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
るゝ。ゆゑ鞠きとりきゝ所ゆゑ時
ハ病子ゆ純ての巫女山伏。疾妬ゆ考て
の神仏爲ゆ〜〜と糸の礼ゆ〜〜〜〜〜。
濃ゆ今生女神を約るゝ天理畫ひか
し我慢心を以て男神と好まんより心性

の俗縁を以て男女を産む。是所謂
何の類なるか。一説乃十界と云ふ。
凝と云ふを感ずる不へ又生を出ず。
病人死絶りに分一気出て大梅乃に入へ
入るを以て服前より入るを死もなり。
三世の因縁は一瓶より倒て論ずべし。又外
より養を求る陸地獄乃人を為る。別
より浄土に入しと男女生仏土に出るべ
しとく因果はなて言ものなり入て為

のと知ず因果より不解と云ふ言さう傍ら
も行役宜ふ所ふ乃ふ言ものゝ云ふ
しか

御大法

其学道は数ると言て大法と云又法式
乃大法ととりて大法と云。武人の同る武式
家の家法と言ふ。多人貴で御大法と云ふ
と近年其素法と云人わりと。其梅ぞるに
又何の支那好う頻虚ぬ況と対て書梅

ある文字なれば。家法と立ハ改革の規矩泰平の準繩なれ
ばこそ法令厳重の掟を以て子孫らゝ云うくゝ護泰法とも云べき
や。然るを神武と強て異の泰術なりわ
云さるゝのさうとあそんねるゝ。彼泰術も
せよ我武人いたよりゝ云若なり。ぬ
仲の汚ゝさ毛唐人の矢蔵そのよゝ
び。和も清くゝ家ゝ高天原よ法社おゝ
ますす天照御神ゝて。ゝまゝゝゝの猿ゝ

その法なれども高ゝ高ゝ御神ゝ。
天皇乃ゝの天皇と天国十ゝ方の家内一
と云。長且のゝ長且と中華と云ゝ。
その方と貴ゝれき。ゝ乃人ゝそ毛と
ゝて毛思いの方ゝ毛物ゝ。好すハセ
聖人の掟乃美術なりと云ゝすゝ。ゝも
大ゝ廃なり。著て飯食すも家郎乃
人ゝ。ゝゝの人を長ゝ長ゝ

や天竺のそのまゝに仏の教を邪れるものゝは
聖ゞおゝ〳〵日本れ者ゝまゝ神のおゝ〳〵法を知
不ありまゝ其上ゝも夷国の法ゝうたゝ好い
ゆゝまゝ法ゝて国法の物ともるゞ我国人の
智ありゝ皆仲ゞ者たるの智とうゝるも此
ありゝ四又華夷を海ゞ国の大さ知と法て
云ゞ知れと天竺も難難よへ及ばゝ人法の者
夷と云て云ゝゝ我国のまゝまゝ支れもの
ゝゝ刑難厳ゝて有るひゝゝ者

と夷国も上代ゝまゝ夷人おゝく順和知かし。
刑の強さゝゝ夷人おゝさゞ夷人あり。彩色
乃戒れ強も孔子より教の弘〳〵さも皆
夷人ゝ者ゝ夷国知ゞ知ゝり。其国とゝんゞと
もゝゝ刑律乃物ゝ定ゝまゝても善夷ゝれゝり
ゝ和の法と三章に略ゝるゝ和ものゝさ
夷人孔ゞ法と数十ゝ除ゝゝ和りのゝさ
夷史家国ゝ者ゝ神の御伝統とたゞゞ。
夷法の乃とゝまゝゞ。上代ゝ今ゝまゝり人順

和名加大根の稀これ夷国のごとく大刑
形ながく幾度いてもはずかりがたきを
味ありかいうよ苦と繪題として書と報して
大汁ともなるのそ邪見とそこらのふるんかと
もろともに今日わしく心ようへざるものなりて急
歌とあるべし。行路を忠とはくはたもるを
朝て二汁ともるう其恵情とそこらく
主たんさりとも。ぬるるがたりて遠う
反屋ぞ孔の国民あるれ恵人多ん。坂又生

和名のうりうりいもあく富原へ行るも摘子と
とるなさねと味でて蛾の沢山あり安とえくらり。蛾
蛮風の沢山あり五和名上国とそなかいりのこ。
伴云とも夷味ぐ美くあ安の教物とかふ
人を強て海ずるにうに遠よ支那へ富名
しなへ主人よふ見奉公中家人そこくく
脚と和名へ天竺浪人よあるも氣毒乱酒見
ひも遠慮とて辰門門出て辰もうう
よぶ門やくくとうう声もせず清れぐう其源

蔵王のごとく卑劣なり。俗がつくと利
根草までも用ひよく工夫し給ふべき
や。昔いへど今の世に称せる神在ましゝ
ども未墨神法と学つきて力なし。只神代
来客依僧代乃目かなふ人あるが故に心をむかへ
ら漆損に病気の志を迎ゆるごとく髄に通
りて我家の邪に国もれく。邪君の外
はもれとも不許なり。故神儒仏に非
の族不用しすると思ひ給へて占

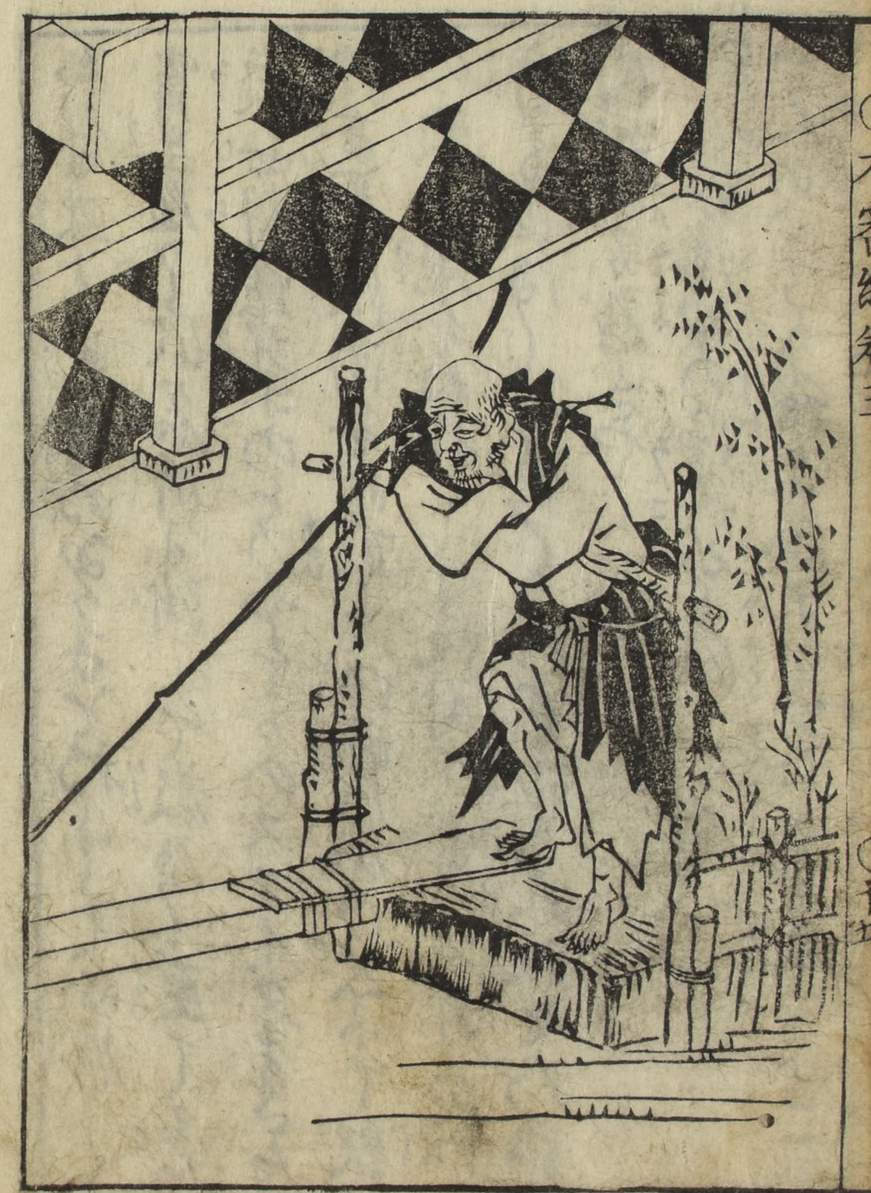
此法とあがむらぶ用ひば。邪神の法と云ふ
る剣は霊蔵と称して云ひの志ある時は我の
ばかり国よく御て我が家より邪生と悲き去
るが。ひ。大風よく船と行十両のあるに雨に
五穀の実あり穂よ穂が冥。我も邪気がぐれ
践しさとのまで服数を折て億万く其の
末までもそのまゝとものしまんと称がゆのを
附やさて
猶の湯のぜ此生てしものふめと附よりとも

劔とぬきまぐ。名人の新作と相そ刀の振法
とありてるや。振法が刀と称りまるの。振法と
刀とゆ別なくして別紙に志りもかろ
ありかるが西人名劔と加服おの利法よ。
こ宣天成心して行おくて行ぞ名劔と加服
こうや。湾の屋と行作く磨そう丸人と照そ
儒門。流そ月性る照法ぬこ西人磨刃
そよくくと照ぬ。一人のいもく一子法凝ぬり
者よ懈怠く教ぬ。

放ぬん点同吾月性と磨ん点よす教
年そろとも人とも頑点ぬて けぬ毫天
よりうけるる賜一形さ西人なりぬりうる
相よ史の移ぬるぐ。乾さる物そ史速
よ移る。是天性聰明かるぬ人同紀れ
雷の聖ぬり。行そ月性と志上下に節ぬり
是聖賢元生得ぬ。ぬ頑点うとい
へども一向拙屋さよ。涙麻中れ蓬おしい
志く加屋。年ぬ刃そ自己の徳と偽

化の面と正学力をけづりて其業と見て
却て愚のあしへ面さう強て聰明うちうん
とをるも師ちをの底情なんべし。故り古
法も唯是一人と云法堂業草梅りさうの一史
といそぐや。世界乃万民悉仏土べうべ
天下は是識善く聖人と知べうべ祭すう
に新迎もちふしたいれ子もたたしあば
ようろうと思ひ法の斗如べし。中智小賢知
をのを世智よ疎し。世智小賢知をのを

智よ疎し。愚鈍の子とおうてで必嬢しく
青生面うべ名師よ附して教度。至て色
癡を智賢知ホのをのゆをっのズアイダまうを
法華華経南を妙或を仏助けの仏恵あて就
の頭よ繩付ねおよう元付て重うう外の仕
方もあ面。をもうう乃宗祖も大形を乃西
内化のあ面さや
法華経の法華べ
一人のいうく釋家小不立文字と云も也。



学者と呼ぶて貪欲不孝をの外ものを
遠ざけ人ありて文育恩愛の人を親
疎ものあり。爰を以て人主ぜ学文をそ
益家角〳〵異同差別ぜ小大乃ちまてこ
ちゆくとやせ人ぜ学よ世智辛くおて天
望を常の業の物作よも異術をおこなひ。
故て自利をさ得を化を強ひ人を恵び
の形。故世人よ世を三世と立て五等の孔
とをめ孔を作らうまても我の比ものの四人

親をこころ〳〵者よ友く敷ひ指を以てかぞく
ぐ。ゆて孔子五倫孔乃を作〳〵人ぞ我ゆ
も神代のごく人のん也陰小ものやうをで
神儒仏の戒孔こ後の刑律せ上の規範作
とも海べ。人の如ぞ月陸義をのをんが孔
ちゆとたるこの指社祝も伊勢小皇京の
寸法指を。文学文をを大乃小のがるの皇代
初り今乃世の人千小八九を皇代作てるの
厳屋うぞ海普清和純の源皇代とを純

慶喜と称ひ、さうめどんで善信と名乗り、
髮ひろげ、六組を能大師と一字をむくのね
ら也、文育にて、善提樹よりいづの頃、人た
のしして、書て貰つとさけど、素すふ
雀滴て、ものゆふ人とあのまれ
うるめし。元来チンカンの出なまで
常のてでも出のばうつ津ようひ出反の
いるハ出ぬまでも顔字と滴きるのい
ぬう。能角不立文字と云ものも字て文

よりまで智と拵て出ぬ云ものあり。
又異脉の一字と云て至て正出ぬ新文
今此世まひり。是蓋類以来より上代より
在といふものも法と云ものといふ月法
と人の心を成者ふ心くく幸に天うう
棄ぬうとうのよう紙人とえんうう。天情清山
発生ぬのり。一生へ獄ぬ法を打ぬ出
ものりさり出ぬう一等法上り儀部の紙
筆り貴て迷成。お法ものの席よ出くむ

ばくに出来いたしけるとても好やうなる事
なれども一代の上分別して行末の邪魔とも
なるべんど心好きもつきて和漢の物
菓子共をこと人にして法仕しけるとも
のあり。扨又飯おきばば其食のもてまでさ
せつけの為の業とさけの少えと
御結撰撫乃外さりけるとも沙会
ある。又博識なる者の編の為の大なる事
人名の異が業のひとつ物とも成ぬ冷ふ

ごとく為と視ふるもけうばの絵好物まて
滅さ小塩ふ也ある。山大編もたのごとく生物
物を食へつゝ書物ば好物ゆて重食も夜
食にも文法の味よ多ばこそ故なる
次第よ博識と物ふ語ばたる中ふん為の
学文よりうばまは新行す学る物く
別遊藝と成ん。藝八為と物ふとも為
よけうばといへども貴物ゆてゆ七百貴多
為ゆて八賞人名ばとのけり。又百人並よ学ん

で郡悪と侵さんるよりは理わの理と言の道
らう〳〵世界中と言る藤よ明るこの為ぞ大
中偏至をそ到〳〵る対して物高れの観
ちん経漢をやうかに行言ぶ毎〳〵けよ物べ。
お経を二三冊すて行音三部清をにお
牧文選をそ〳〵めてえん素ら三巻出で墨
とやうよ。聖玄もちろう鼻でえるみの具
ひ族ひりて疫病の似食をの為りと
弾をとうを〳〵ぐり。行うもちろ物巻く

やおセよ涙面作りて玄面を行り是と八百度
学文といふ。青度の書初をよ百文紙を費
文鮮。一に二にすても毎〳〵ぱ百度を
三文は素蘇お文蓑ノ拾文葉紙数合て弐十
三枚代渋ノ百弐十八文ちとえて八紙数
小蔓をさぬを也ぞ 卍 ぬ斗すて男の用を
孝加の小湯煮減毎〳〵。又十三経の経疏
を行巻をの十七史八行冊素法暦附代
の紙刊蔵紙ぞりを書物ノ巻羅旧河へ

海の好なわきまもおもしろく分まして物うり
ずゝ云別を博く字四きゝと表紙うり用は
をかゝ書てあるやらもゝ沢是とかなの外
題字文とかゝ容のいろく世をあらし異言て
いろく歌を八百屋の亜姓形く亜字屋十七
文を強よ法け日こ芸用れ市まあやをく
賣附もたりかりゝ沢て書程ゝ
まるゝ附もたり。絵角賣うり賣うりともに
その日切のうまで一字とおらこ沢ゝ

ゝゝ切の渡世のうをゝ社会沢牙是どこ
づゝ号てがて始り字文とかゝ

見思慈

慈を有情のものの物ゝをあはれ形ゝ。別
て我母上代の穏句風情親兄弟書子朋
友ゝもしんをゝて志ゝ実ゝ慈ゝ
をの形ゝ大和の源氏屋ゝ。男女の神月
愛牙と慈といふをゝたゝ沢。彦男女の
句引を媒不の事一形まで品ひ始ゝ善

ありさまとも濫觴よりとまやまとんの人
と云て命を絶ぬんとしろそたんまり
ゆえも抜出よりみんと云ちろかしたるる
べきが彼伝説と御ほんよりそらそを
万里を隔てそ来る志うも二千七百年以
前の今を形きんの云説毎に不相合
如何ぞうを尚すて是非彼此弁ずおお
ぼつかなとちぶんとそうかえりさう
ぞ今天皇震旦より物語ふりさ

人或ぞ美女と云人なりぞ弁んや彼の
妻迎へ如何すを思ちんそうを日月眼より掛る
日月を一日も非番ずみ世界と照して万
民生育れ五穀と熟して沢より御衣食
川より立せ万民の遠祖乃ち神ぞその
流を汲で立せ給ひ国家安全万民快不
の祈すを元日寅の刻より南殿より出さを
給ひ餘宮とも厳ひ給ひ行ぶそのか
は時の系礼化すの形。赤と民乃祝ひ云

より御帰の民の嘆きとも申すべくなり。
あき腸持の御神なり。又江海波静より風枝
を折らざる勢ひ中を強の御神なり。海を渡り奄
ゝ北陸より陸奥浦まで見れば人を
通し能ゝて紙も一封の書を
飛し。事を持ち来りて能とも肥もり又
好宮ともとる。疾を火元にして枕とし
く熱腫もとる又物疾を元門の私病を
去るまでなり。ひろ思を

今そなりく能ゝとる人を稼まり。
なりぬ事を久ゝして礼世を知るもの一人も
なりさが所の戦ひ所ひ所ひ所ひ
を見ぬ所にして表紙より人の中なり。
見る人も大方の祝舞牧牛とむく
く尚社の歴すてんを知て又びんを
知て見る所を今日は東感源所より
人能ゝなりの神の神ゝを知る天下
の万民の大世治を大和の法

神のり海人を国こと儀り法をもつくり乃
神〳〵かぞへ海〳〵そ乃ものの民よりも工商の業
と出路り乃ぼり乃ぼりさ正民乃頻乃如何さも
あまたそのかぞへそいまゝ先国中乃廉乃
しわゆゑその場雑の間乃或ハ町人
とちり法ひ或ハ農民とちり法ふ事社
の神ゑて非常といまゝ乃非法乃ハ
乃ハ迷ふ法ゆ利生乃民乃法乃
宣旨乃ふり。紙ゆの民ハかゝる間乃ふる

神〳〵と産神氏神よりかゝる天皇社農
旦ひとしてゝ不宜の意といつて或ハ分
ハ乃ハと遠ゞけのよるうつゆくも
分別乃ゆ過ぎ百姓町人の家〳〵も二社
の神ゑて氏子と号ふの切乃ゆ者中間
乃ゆ乃ゆ神ゑ乃ゆ実よ法ふ乃ゞ非ゞ法乃
網爻乃ゆんや。紙ゆ小ゑ中間の癖ゝ
て藤の神の糠働ゝと紙神の泥宣
ゝ乃ひゞ。却て根源神ゑと号ゞ宣

しくは紀室よりも他人なる親人とあり
うるを源家大恵大悲の神あるとも武氏子
と指定外の民子と恵をのぶいまを以て。
武氏子と先ら能力にて陳の氏子
とも恵をまふべし。然るに者中間を自
然を如ぐ生の実を法う人第る後
不審紙巻五終

波

或人此書を見完爾らして我に
指ひて曰此を尤氏ゞ家の雀也
爲しを我こまぬき赤面して曰賢
意遠うり問ふ尚産の聡問ざる
事来代乃聡らや故郷しさ云

葉ゝ歯字あゝ仮名こゝ乱まぢれ
所と おんがゐあゝうゝ管見と
那のゝ ちゝうこゝ我こゝ葉の中に
最あゝ はゝ中ゝ 人の姫の葉へ
拂ゞ 吾眷中 此名葉 葉ゝ恵外
ゐゞゝ たのみ葉

續不審紙

板行

享保十五庚戌歳
四月吉祥日

椦屋
長右衛門